牧師所感：　人としての尊厳を敬意を持って弁護
― 後藤 貞人弁護士の 人間愛 ―

筆者は 朝日新聞の購読者である。ところで 毎月第二土曜日 別刷として、「ｂｅ」欄に 興味深い記事が 沢山掲載されている。

昨日の「ｂｅ」には 弁護士 後藤 貞人さん（76 歳）の紹介。「はみ出しても 1 人は味方がいる。」に興味を持って読んだ。記事を書いた 文・阿部 峻介、写真・外山 俊樹 両氏の文 及び 大版写真入りの記事を 丹念に読んだ。「ｂｅ」紙二枚に ぎっしりと書かれた記事に、後藤弁護士の人間に対する尊厳の思想と人間愛を読み取ることが出来たのである。

さて 文章全体を御紹介は出来ないが、後藤弁護士の大事な思想の一部分を、お読みになられなかった方の為に記す。

記事「『最初に入った事務所のボスが どんな刑事事件でも受ける人で、段々と件数が増えていった。それに お金や家族関係の紛争よりも、法廷の緊張感があり、依頼人の人生がかかる刑事事件の方が性に合っていた』暴力団から頼られることも多い。何故 世の中の『嫌われ者』も弁護するのか。根本には 『どんなにはみ出した人でも 一人は味方がいる社会に』という理想がある。『形だけ 弁護士が付くのではなく、全力を挙げる。それを制度として保証する国が我々の過ごしたい国ではないかと。』『技術を磨け』が口癖だ。情熱はいい。一に技術、二に技術、三、四がなくて、五に技術だ……。『研修派』と揶揄されています。」

さて 以上が引用文であるが、もう一箇所を紹介する。読者の御理解を請う。

「有罪率 99％の日本の裁判では、無罪判決を 1 件取れれば上等とされる。それを毎年のように獲得し、30 件近くを確定させている。今は『ライフワーク』と位置付ける研修で全国を回り、技術の伝承にも 力を注ぐ。真骨頂は 法廷での弁護に表れる。」

ところで、このような人権弁護士（？）を擁する国は 如何に幸福であろうか。

そもそも 筆者は牧師として叙任された。使命としては 牧師も弁護士も、人間の尊厳を尊ぶ 聖職であることを 再び 肝に銘じる昨今である。